

イーハトヴの地図

——宮沢賢治・心象の空間と遍歴——

秋 枝 美 保

宮沢賢治は、自分の書いたものを「心象スケッチ」と呼んだわけであるが、その「心象スケッチ」の特徴として、日付が付されていること、実在の地名、人名が登場することが挙げられる。これらは、いずれもスケッチがなされたコンテクストを明確にする努力と言えよう。つまり、自らの心象が織りなされた実在の時間と空間を明示するものであったと考えられる。記録の一回性、限定性を忠実に示すことが、記録の信頼性につながることは言うまでもあるまい。賢治は、その徹底した記録の中に、個を越える要素があるかもしれないことを信じ、その記録という行為に自らを投企したのだと言える。

たゞたしかに記録されたこれらのけしきは
記録されたそのとほりのこのけしきで
それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで
ある程度までみんなに共通いたします

(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに
みんなのおおのなかのすべてですから)

とりわけ、賢治は、自らの心象の空間について独特の把握をして

『春と修羅』第一集序

いた。童話集『注文の多い料理店』には、「イーハトヴ童話」と角書きが付されているが、「イーハトヴ」は、実在の岩手県に深く根ざした賢治の心象の空間に付された地名である。賢治のスケッチの舞台を眺めてみると、賢治の活動の状況につれてクローズアップされるいくつかの地方があることが認められる。それらの地方には、それぞれその地方独自のイメージが付与され、そのいくつかの地方を合したところに「イーハトヴ」全体の様相が浮かび上がっていくと思われる。それが、言わば賢治の「心象宇宙」である。

このように考えていけば、「心象スケッチ」を、童話も詩も含めて、その舞台によって整理し、一つ一つの舞台をイメージ化していくことが、賢治の心象の遍歴を考える上で、本質的な問題を浮び上がらせることになると思われる。そもそも『春と修羅』第一集の「序」において、「心象スケッチ」は、次のように定義されているのだから。

これらは二十二箇月の
過去とかんずる方角から
紙と鉛質インクをつらね
(すべてわたくしと明滅し

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでたもちつゞけられた

かげとひかりのひとくさりづつ

そのとほりの心象スケッチです

この発想の根底にあるのは、「二十二箇月の過去とかんずる方角から」という表現にもあるように、時間の流れを空間に転位しようとする意図である。それは、第一集の詩が日付けの順に、時間の流れに従って配列されていることに見合うものである。また、「紙と鈿質インクをつらね」「たもちつゞけられた」「かげとひかりのひとくさりづつ」といった表現からは、それら個々の心象スケッチの連続性が強く感じられる。

また、第一集冒頭の「屈折率」の中では、詩人は、自らを「陰気な郷便脚夫のやうに」これから長い道のりを歩かなければならない旅人として描いており、集中でもしばしば歩く人物として描いている。言わば、『第一集』全体は、詩人の歩いた全行程として読むことが可能である。その場合、実在の地名は、詩人の全行程の中で、それぞれ何らかの拠点としての意味を持つのではないかと推測される。『春と修羅』における詩人の場所の移動は、その場所につまづるイメージと深く関わっており、単なる身体的な移動を示すのみでなく、詩人自身の心象の遍歴をも示すものと考えられるのである。

とりわけ筆者の関心は、柳沢、滝沢、一本木といった岩手山麓あたりのイメージを明らかにすることにある。特に「一本木」は、童話「土神と狐」の舞台にもなっている。童話「土神と狐」は、既に指摘されてきたように、詩篇「春と修羅」における「修羅」のイメージと類縁性を持つ。その童話の発想の原風景を、「一本木」とい

う場所に探つてみたいという思いが筆者にはある。その目論見を内に秘めながら、本稿においては、『春と修羅』第一集における岩手山及び岩手山麓のイメージについて概観しておきたい。

その作業を進める前に、「イーハトヴ」の地図をイメージする必要がある。そのような作業に最初に手を付けられ、大きな成果を挙げられたのが小沢俊郎氏であることは言うまでもない。氏はその新しい研究分野に「賢治地理」という名を定着させられた。筆者の関心は氏の業績から示唆を受けるところ大である。

賢治の作品の舞台を概観して気付くのは、その舞台が大きく二つの地方に分けられることである。小沢俊郎氏は、「嶮しい奥羽脊梁山脈と、隠やかな北上山地」という二つの地方を、賢治作品の代表的な舞台として対照的にとりあげている。その二つの地方のグループ化には、賢治の地質学的な見地からのイメージ化があるようである。⁽³⁾「巖手県稗貫郡地質及土性調査報告書」第一章、第一節「地形ノ大要」には、「本部ノ地勢ハ北上平地ヲ中央トシ其以東ハ東部丘陵及東部山地に区分シ其西部ニ於テハ西部丘陵及西部山地ヲ区別ス、東部山地ハ北上山地ノ一部ニ属シ西部山地ハ陸羽ノ境界ヲ南北ニ走レル中央分水嶺ノ余波ニ属ス。」とあり、「北上平地」を中央として、「東部丘陵」「東部山地」「西部丘陵」「西部山地」というグループ化をしている。さらに第二節「岩石及地質系統」において、「東部丘陵」「東部山地」の大部分が「古生層」に属すること、「北上川以西ノ丘陵地及山地ノ大部分」は北上平地の一部が、「第三紀層」に属すること、「北上平地ノ殆ント全部」と北上川支流に沿う一帯が「第四紀層」に属することを示して、東部と西部のグループ化が、地質系統から見ても妥当なことを示している。

この賢治の岩手県土についての概観は、現在でもほぼ同じようになされているようである。

岩手県は地質学的には、県土のほぼ中央を縦断する北上低地帯を境に、大きく東の北上山地地域と西の奥羽山脈地域とに区分されます。北上山地には中・古生代と古第三紀の堆積岩と火成岩や変成岩が分布するのに対し、奥羽山脈には新第三紀と第四紀の火山岩や堆積岩が分布しています。また、北上低地帯は第四紀の堆積岩からできています。(岩手県立博物館 総合案内)

この説明のように、岩手県土は、その成り立ち、地質から、奥羽山脈一帯と北上山地一帯とに大別されることがわかる。イーハトヴの構想が、この異なる二地方のイメージの上に成り立っていることは確実である。

この二つの地方に書き分けがあることは、概にいくらかの指摘がある。例えば、内田朝雄氏は、「賢治詩と自然観」の中で、「岩手山は第一集に多く出てくるが(岩手山)、長詩「東岩手火山」、「鏡岩流」等)、第二詩集には北上山地が頻繁に出てきて、賢治の内部の移り変りが見えるような気がする。」と述べている。また、小沢俊郎氏は、「北上川に添って」の中で、賢治作品に登場する「川」を基点にしながら、興味深い発言をしている。賢治の散文の出発点から「丹藤川」という北上川源流にあり、賢治の生涯は、北上川源流から下流へ下っていく川筋と軌を一つにしていることを指摘し、その行程について「連れを欲した一牛だったと思わずにいられない」という感想を付け加えている。このように、二氏の指摘は、賢治の心象の遍歴と場所の移動との関連を考える上で、重要な問題を提起し

ている。

その問題提起を展開させるために、前述の二つの地方が賢治の「心象スケッチ」等にとどのように登場するかを概観すると、まず「丹藤川」「秋田街道」「沼森」「柳沢」「台川」といった初期の随筆的なものから『春と修羅』第一集までに描かれた舞台は、花巻から西北の山側へ向かっており、「岩手山」とその山麓を極北とする山岳地帯一帯に集中すると言つてよい。また、童話は、舞台の特定が困難であるが、實在の地名が出てくるものを中心に見なければ、童話集『注文の多い料理店』の舞台も、「狼森、穴森、盗人森」を中心として、岩手山麓周辺と重なると考えられる。童話の舞台については、金子民雄氏の業績が参考になる。『檜の木大士の野宿』は、葛丸川流域、「鳥をとるやなぎ」は南唱山のふもと、「土神と狐」は一本木というところで、いずれもこのグループに属する。「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」のサンムトリ火山のモデルも「岩手山」と考えてよい。「七ツ森」を横に見、彼方に「くらかけ山」を見ながら出発した『春と修羅』第一集の世界が、岩手山とその周辺の山麓を一つのイメージとしてとらえた上に成り立っていることはまちがいない。

これに対して、『春と修羅』第二集の舞台は、花巻から東の海側へ向かう新しい方向を示している。それは、北上山地から三陸海岸へと向かう高原地帯であり、賢治が「海蝕台地」「準平原」と呼んだ場所である。童話「風の又三郎」の発想の原点である「種山ヶ原」、童話「銀河鉄道の夜」の発想の一つにある釜石線の鉄道や北上川下流がこちらのグループに属している。

このように、『春と修羅』第一集から第二集へと大きく舞台が移

動かすことがわかる。それが賢治の心象の履歴の上で、大きな方向転換を意味することは確実である。その曲がり角は、どのようにとらえられるだろうか。それを考える上で、「岩手山」とその山麓一帯のイメージを考えることは重要である。「春と修羅」第一集で最後に到達した場所が「一本木野」と「熔岩流」であり、そこが北上山地側へと方向転換をする際Uターンの頂点にあたるからである。岩手山周辺は、既に小沢俊郎氏が「秋田街道」「沼森」といった文章の中で指摘されたように、賢治の盛岡高等農林時代の友人たちとの、青春の根源的な体験の育まれた場所である。特に柳沢の夜行軍の思い出は、後に書簡の中でくり返し言及されている。また散文「柳沢」は、斎藤文一氏によって、賢治の「宇宙観」が確立したとされた場所でもある。

その岩手山麓は、『春と修羅』第一集においては、どのように登場して来るであろうか。第一集における行程は、冒頭の二詩「屈折率」「くらかけの雪」にあるとおり、七ツ森を横に見、鞍掛山の方を目ざして始まっている。特に詩「屈折率」は、これからの行程を暗示している。光は、二つの異質な物質を通過するとき、各々の物質中での進み方が異なるため、二つの物質の境目で折れまがって見える。詩人は、歩いて行く自分の行路を、その光の進路のようにイメージしているのである。ちょうど「七ツ森のこっちのひつつ」あたりに、異質な空間との境目があり、今まさに「わたくし」は、異質な空間の中へ進み入るところである。既に何度も通った道であるのに、空間が変質してみえるのは、「わたくし」自身の内面の「屈折」をそのまま反映しているのかもしれない。そういう意味でここに始められた徒歩行が、やはり一つの「異途への出発」である

ことが示されていると言える。もはや青春時代に幾度も通った道ではあり得ないのである。

冒頭に続いて、鞍掛山麓の野原を目指して計画されたのが、小岩井農場行であることは言うまでもない。

これから五里もあるのだし

くらかけ山の下あたりで

ゆつくり時間もほしいのだ

あすこなら空気もひどく明瞭で

樹でも岬でもみんな幻燈だ

もちろんおきなぐさも咲いてゐるし

野はらは黒ぶだう酒のコップもならべて

わたしを款待するだらう

詩「小岩井農場」については、既に天沢退二郎氏、杉浦静氏の詳細な論がある。この「小岩井農場行」は、天沢氏が言うように、詩人自身の大きな投企を秘めた試行であり、それによって、結果的に分裂した詩人の意識の一つの態度を選択させることになったと言える。杉浦氏が言うように、詩人の分裂した意識の底に、人間関係の軌跡があったことも確かであろう。小岩井農場行は、第一集全体の行程の中においてなされた、最初の大きな徒歩行として重要な意味を持つ。

そして、その徒歩行の中で、岩手山麓「柳沢」「滝沢」が、下書稿の中で実にドラマティックに登場するのである。これもすでに天沢氏の指摘以来周知のことであるが、当初の計画では、小岩井駅から北へ向かい、小岩井農場をつつ切って、狼森の右を通って姥屋敷へ出、鞍掛山麓でゆつくりして、柳沢へ抜けて東北本線滝沢駅から

九時の汽車で帰るといふ五里六里のコースが考えられていた。だが、「わたくし」の中には、この単独行を「あまりに」「寂しい」と感ずる心があり、教員室で同僚と過ごす団樂のひとときにも心魅かれていた。どうしようか迷っているうちに雨が降り出して、結局楯屋敷の手前の方で引き返してしまふ。

雨だ。たしかだ。やっぱりさうだ。

降り出したんだ。引っ返さう。

すつかりぬれて汽車に乗る。

教員室の青ぐるい空間。

チョコレートと椅子

(私はどうしてこんなに

下等になってしまったらう。

透明なもの燃えるもの

息たえだえに気圏のはてを

祈つてのぼって行くものは

いま私から 影を潜め)

〔中略〕

さあ引っ返すぞ。こんどもやめだ、

おゝい柳沢。

鞍掛も見えないがさやうなら、

引っ返せ 引っ返せ

教員室での人間関係の磨擦といった「下等」な悩みに動揺するそのときの「私」の心の表面からは、五里の単独行を決行するに足る「透明なもの燃えるもの」は消え去り、「影を潜め」てしまつていた。鞍掛山麓から岩手山麓にかけての一带を屈指して歩くことは、

「息たえだえに気圏のはてを／祈つてのぼって行く」ことに等しい行為だったのであり、「私」にとつて柳沢、滝沢のあたりが、「聖地」としての意味を持っていたことがわかる。そして、詩「小岩井農場」では、ついにそこまでは行くことができず、途中で断念されたのである。

それに対して、「小岩井農場」という場所は、次のように描かれている。

さうです 農場のこのへんは

まつたく不思議におもはれます

どうしてかわたくしはこころを

der heilige Punkt と

呼びたいやうな気がします

「小岩井農場」は、「der heilige Punkt」(聖地)そのものではなく、「と呼びたいやうな気」がする場所、つまり、聖地の幻影にとられやすい場所としてあったと言える。「私」は、柳沢、滝沢に行くことができなかつたことよつて、結果的に聖地の幻影によりかかつて孤独から脱け出そうとする自分の弱さを断つという方向をたどることになつたと考えられる。そして、「わたくし」は、農場を出て、「かつきりみちをまが」り、以後、心象スケッチの徒歩行の中でこのように小岩井農場を歩くことはなかつた。

さて、詩「小岩井農場」以後、詩人の中で、地名が明記されて明らかに、窮極の場所、岩手山、岩手山麓に足を踏み入れたとわかるのは、次の詩である。

| 題名 | 詩に付された日付 | 詩集上の位置 | 年譜上の記載事項 |
|---------|------------|---------------------|-------------------------------|
| 「滝沢野」 | 一九二二・九・一七 | 詩章『グランド電柱』最後 | 9・17(日)午後、生徒五・六人をつれて岩手山登山に赴く。 |
| 「東岩手火山」 | 一九二二・九・一八 | 詩章『東岩手火山』冒頭 | 9・18(月)山小屋で泊る。 |
| 「風林」 | 一九二三・六・三 | 詩章『無声慟哭』最後の二篇 | 6・3(日)生徒を引率しての岩手登山中のスケッチ |
| 「白い鳥」 | 一九二三・六・四 | 右に同じ | 6・4(月)前日から夜を徹して歩いた翌朝のできごと。 |
| 「一本木野」 | 一九二三・一〇・二八 | 詩章『風景とオルゴール』最後から四番目 | 10・28(日)日曜日の一日をぐんぐん歩いた。 |
| 「鎔岩流」 | 一九二三・一〇・二八 | 詩章『風景とオルゴール』最後から三番目 | 10・28(日)右に同じ |

これを見ると、いずれも、詩章『オホツク挽歌』を除く三つの各章の末尾、あるいは冒頭に位置しており、それぞれの詩章において、詩人の降り立った特別な位置を示すように思われる。また、この六詩篇は、年譜上に記された実際の岩手山、岩手山麓行(三度)とそれぞれ、二篇ずつ対応していることもわかる。しかも、この三回のうち、二回までが日曜に生徒を誘っての登山行であり、小岩井農場行で果たされなかった岩手山麓への単独行は、詩集末尾に近い詩「一本木野」「鎔岩流」で漸く果たされたと言いうことになる。

その単独行の中に、第一集全体の詩作のたどりついた最終地点もあると見てよい。なぜなら、この二詩篇は、そもそも詩集全体の編

集の第二段階においては、「自由画検定委員」とさし替えられて、巻末に置かれることになっていたのであるから(校本全集校異)。続く編集の第三段階で、その後、二詩篇「イーハトヴの水霧」「冬と銀河鉄道」が付け加えられて、刊行の形となった。

この二詩篇「イーハトヴの水霧」と「冬と銀河鉄道」においては、水霧に閉ざされたイーハトヴの原野を、北上川沿岸を下って、沿線の「土沢の冬の市日」を車窓に映しながら、確かに北上山地の方角へ向かって走り出している銀河鉄道が描かれているのである。「第一集」、「第二集」の末尾には、いずれも「冬と銀河鉄道」「岩手軽便鉄道の一月」という鉄道での移動の詩が置かれていることも

面白い符合である。それぞれの集の終わりに新しい方向へ向けての大きな方向転換がイメージされていると見ることが出来る。

このように第一集全体の行程を概観すると、小岩井農場行で果たされなかった「聖地」行が、三回の岩手山・岩手山麓行と、その間にはさまった樺太行によってはたされ、次第に心象が展開していく過程をたどることが出来る。天沢氏は、「心象スケッチ」という詩法と歩行との「密接不可分」の関係を夙に指摘していたが、今さらながらに「心象スケッチ」という試みが、特定の場所への身体の移動——高みに挑むこと、あるいは北上すること——によって、同時に展開していく心象の動きを総合的に書きとめていくことであった、(というのも少しずれる。「書くこと」自体も同時に展開していく。)のだと実感される。それは、一種の「行」といったものを連想させる。「心象スケッチ」は、「行」という信仰の全存在的な実践の場そのものであったとも言える。

先に挙げた六詩篇のうち、詩「滝沢野」・詩「東岩手火山」、詩「一本木野」・詩「熔岩流」という二組の詩には、いずれも岩手山麓の野原から岩手山へと共通した展開を見ることが出来る。實在の「滝沢野」「一本木原」は、小岩井農場で目指されていた「柳沢」に続くすぐ北の原野である。この辺りは、どのようなイメージの場所なのだろうか。筆者は、賢治が實在の地名を登場させることで提示した心象宇宙の限定性をつきつめてみたいと考えた。宮沢賢治の心象の一回性、限定性をたどることによって、宮沢賢治の心象を越える風景を垣間見ることができればと願ってである。一つの試みとして、先般、滝沢から柳沢、一本木を通して、焼走熔岩流まで実地踏査

を行なった。(同行して下さったのは、和賀の彫刻家児玉智恵さん、西根町在住の岳人田村太郎さん、郷土文化研究者工藤正之さん、一本木在住の水道組合副会長角掛清見さん)だが、このフィールドワークの成果は、発表するまでに今しばらくの時間が必要である。本稿においては、文献上から浮かび上がる岩手山麓のイメージを明らかにしておく。

最近の宮沢賢治の文学評価の視点の一つとして、賢治文学の縄文性の指摘がある。牛崎敏哉著「宮沢賢治の縄文意識——どんぐりと山猫をめぐる——」(『第38回岩手芸術祭県民芸術作品集』、岩手日報、昭和62・10・22)を始め、田口昭典著『縄文の末裔・宮沢賢治』(初出は、『北域』31号・平成2・6・20)同36号。平成5・3、無明舎出版)、網沢満昭著『宮沢賢治縄文の記憶』(平成2・11、風媒社)といった文章が次々と発表された。また、赤坂憲雄氏の「柳田國男、ブナの森の蔭に——稲作以前、または東北の基層文化」といった文章もあり、賢治の文学と、「東北の基層文化」との関係の深さが指摘される昨今である。

ここで問題にしようとしている柳沢、一本木のあたりは、実は県内でも有数の「遺跡の宝庫」として知られている場所なのである。なかでも「縄文時代遺跡」は有名で、「縄文時代後期前葉に関して」は、資料内容も充実しており、考古学上貴重なデータを提示している¹³⁾ということである。「古代の岩手山麓滝沢は、岩手山の伏流水による沢の流域で農耕をやり、広い山野の自然物を採取し、川からはサケ(鮭)などもとれて、豊かな生活条件をそなえた地域であった¹⁴⁾」という。言わば、この地域は縄文文化の栄えた古代の楽園であったといえるようである。それは、童話集『注文の多い料理店』の

だが、これも詳細は不明という。

滝沢村の発掘調査は、昭和四十八年の東北自動車道の建設に先立つ緊急調査によって初めて本格的になされたのであって、それまではほとんど注目されることはなかったようである。だが、大正年間に、少数ながらある関心をもってこの地を訪れた人物たちがあり、その中の一人として賢治も存在したのである。(因みに、賢治がイギリス海岸で拾ったくるみの化石が、東北大学の地学者早坂一郎によって「地学雑誌」に発表されたのが、大正十五年のことである。地質学徒賢治に考古学的な関心があったであろうことは、確実である。)

この滝沢村には、このような考古学上の意義に加えて、伝承の世界における特異な位置がある。東北の縄文人を考えると、必ず問題となる蝦夷の伝承である。大昔、滝沢村には、蝦夷の族長、大武丸が住んでいたという。大武丸は、胆沢の族長で、達谷窟の高丸(悪路王、アテルイ)に並ぶ大者であり、紫波、稗貫、下閉伊地方に多くの家来を持っていたという。「滝沢の今昔」⁽¹⁷⁾には、次の様に紹介されている。

今から千年以上も前の大昔、滝沢村鶉銅字安達(姥屋敷の南方鬼越の少しむこう)、昔の道路「奥の道」「金のみち・銅のみち」のそばに長者館というところがあって、この付近に住んでいた人々の長であった大武丸という人が住んでいた。

〔中略〕

大武丸は、滝沢村の長者館に住み、村人から食べ物をはじめいろいろな物を調達したり、現在の鶉銅を通り夕顔瀬町のあたりまで出沒して物品、食品を奪い取ったり、道を通る旅人から

金品、物品を奪い取ったりして、ぜいたくな暮しをしていた。屋敷にはたくさんの立派な庭石を置き泉をつくったりしていた。へん立流な所に住んでいた。ここは滝沢村の遺跡(散布地——縄文)になっている。ここの地下から「カランコロン……」という音が聞えて来るとか、宝物が沢山埋まっているのではないかなどと昭和四十年代に部落の人々が掘って見たという話がある。

大武丸は、胆沢の悪路王同様、坂上田村麻呂に敗北するが、この伝説の後半は、大武丸のその最後までを描き出している。田村麻呂は、延暦二十年(八〇一)、征夷大將軍となり、蝦夷征伐にとり組むが翌二十一年には胆沢に胆沢城(現、水沢市佐倉河)、翌々二十二年には志波城(現、盛岡市太田)を築いて、基地とした。特に志波城は、最北端の城冊であり、ここを基地として、田村麻呂は岩手山麓を攻めた。

この坂上田村麻呂と大武丸との戦の伝説は、このあたりの地名の起源譚と重なっている。その地名譚の中に、他ならぬ「一本木」も登場する。田村麻呂は、岩手山の麓を大釜、篠木、大沢、鶉銅、滝沢元村と攻め従え、大武丸を追って一本木まできたところ、野原の中に年を経た大きな柏の木が一本あったので、その木陰を陣地として大武丸を攻めたという。それでこの地は「一本木」と名付けられたという。(この柏は、詩「一本木野」に、「おいかしは／＼てめいのあだなを／やまのたばこの木つていふつてのはほんたうか」とうたわれた大柏で、角掛清見氏(大正九・生)から実在した木であることを聞いた。柏の木としては珍しい大木であったが二十年ほど前に枯れたという。その切株だけが今も角掛神社のすぐそばにある。

(筆者実見。)その後、追いつめられた大武丸は、岩手山九合目岩穴に立てこもったので、そこは「鬼ヶ城」と名付けられた。さらに追われた大武丸は、御神坂から盗森を下り、長者館を通って、燧堀山の北側の坂を下って逃げ、諸葛川の河原でついに力尽きて、首をはねられたという。その間の「鬼越、鬼古里山、鬼越坂、盗森、ガンドウ沢(ガンドウはアイヌ語で泥棒のこと)」といった地名は、大武丸との関りからきているという。

このように、現在の小岩井農場あたりから岩手山麓に至る一帯は、縄文文化繁栄の地であると同時に、その文化が大和朝廷の全国統一にあたって、国家社会に組み込まれることに最後まで抵抗した証の残る場所と言える。ここに紹介された伝説や地名譚を見ても、大武丸は「盗人」、「鬼」とされ、恐怖すべき悪者とされているが、それは征服者側の意図の反映であると思われる。岩手山神社をはじめ、このあたりの神社に多く坂上田村麻呂が祭神となっているのも同じ事情であろう。

地名起源譚と言え、狼森、笹森、盗人森がすぐに想起される。前述の大武丸の伝説における地名譚と比較すれば、賢治の地名譚が、岩手山麓に古く住んでいた人々の視点から描かれた神話であり、この土地を征服者側の視点から解放する意図を持っていたことは明白である。そこに、原・滝沢村の姿を呼び起こすこと、そして、その上に新たに「イーハトヴ」というドリーム・ランドを構想することが、「イーハトヴ」構想の大きな意味の一つであったと思われる。ただ、賢治の作品に直接大武丸の名が出ることはない。関連を挙げるとすれば詩「原体剣舞連」を挙げることができよう。関屋光昭氏によれば、江刺市原体は、田村麻呂に追われた「人首丸」

が姿を隠したところであり、この「人首丸」が「大武丸」の息子にあたる。人首丸は捕われた時、十五、六歳の若武者で、美少年であったという。吉見正信氏は「原体剣舞連」——その実景からの志向⁽¹⁸⁾において、原体剣舞と悪路王伝説に言及されるとともに、原体剣舞の独自性が、舞手が少年である点にあることを指摘しているが、人首丸伝説との関連があるかもしれない。また、鬼ではないが、賢治の作品に登場する「山男」のホームグラウンドが、「岩手郡西根山」であることも想起しておこう。「西根山」というのは、特定の山に付された名前ではなく、岩手県各地で、「西の方の山」という意味で使われていると⁽¹⁹⁾のことで、賢治の土性調査におけるグループ化に従えば、「西部丘陵、西部山地」にあたると思われる。やはり、岩手山麓周辺にあると考えてよからう。

このように、岩手山麓は、古い歴史のある土地であり、特に縄文社会と律令制国家との最後の葛藤の地と言えよう。賢治作品に登場する「悪路王」も「山男」も、国家に組み込まれる前の、縄文的な解放された生命のあり様を象徴するものと思われる。そして、その地の最北端に岩手山がそびえている。岩手山は、新第四紀の火山活動でできた新しい山である。江戸時代に特にその活動は激しく、貞享三年から享保四年までの間に九十四回の噴火があったという。焼走熔岩流は、その享保四年の噴火の時にできたものである。大正八年にも鳴動があり(これが最後)、賢治生前は、まさに活動中と言ってよい火山であり、賢治にとって、生命の原初のエネルギーを体感させる場所であった。詩「滝沢野」・詩「東岩手火山」・詩「一本木野」・詩「熔岩流」に見られる岩手山麓の野原から岩手山へという行程は、解放された純粋な生命の裸形の姿を追及する過程では

なかったか。言い換えれば、山野を歩き、岩手山へ登ることは、生命を気圏の高みに解放し、燃焼させることによって、自己のあり様を、全存在的につきつめることではなかったかと考えられる。まさしく、「透明なもの燃えるもの／息たえだえに気圏のはてを祈ってのぼって行くもの」とは、そのような行為であると思われる。岩手山の高みは、星の向こうの聖なる空間から何らかのインスピレーションを得る場所であった、それは、詩篇「東岩手火山」と詩篇「風林」に最もよく表現されている。

蛋白石の雲は遙にたゞ／オリオン 金牛 もろもろの星座／
澄み切り澄みわたつて／瞬きさへもすくなく／わたくしの額の
上にかがやき／さうだ オリオンの右肩から／ほんたうに鋼青
の壮麗がふるへて私にやつて来る (「東岩手火山」)

とし子とし子／野原へ来れば／また風の中に立てば／きつとお
まへをおもひだす／おまへはその大きな木星のうへに居るのか
／鋼青壮麗のそらのむかふ／〔中略〕とし子 わたくしは高く
呼んでみようか (「風林」)

二詩は、いずれも、その身体の移動とそれに伴う意識の移動の点で、「銀河鉄道の夜」において、天気輪の丘に駆け上がるジョバンニのそれを思わせるものである。

言わば、岩手山は、熱い生命のエネルギーの根源であると同時に、そのエネルギーが、空の星に近付かんとばかりに噴き上げ、高まる聖への志向の根源であると言える。ここでは、生命の志向と聖への志向とは一体化していると言つてよい。岩手山は、もともと山自体が御神体であり、信仰の中心であった。賢治が「イーハトヴ」

構想の中でイメージした「ドリームランド」とは、そういった信仰のあり様が、息づいている楽園ではなかったか。それは、例えば「鹿踊りのはじまり」や「狼森、笹森、盗森」に見られるような「食」あるいは「盗み」という行為の神聖さにも見ることができ

る。
岩手山麓周辺は、そういった古代的なイメージと裏腹に、忽然と出現した西洋式のモデル農場「小岩井農場」によって、全く別世界の幻想を立ち上げられる基点ともなった場所であることも忘れてはなるまい。一本木野に揺れる柳は、「ボルガのきしのそのやなぎ」(詩「一本木野」)ともなると言つた具合である。また、一本木は、当時放牧地ではあったが、遠くから盛岡の騎兵隊の演習の音が聞こえ、賢治も、盛岡中学時代、発火演習でこの地を訪れている。そういった当時の社会の波も打ち寄せる場所であった。つまり、小岩井農場から岩手山麓にかけての一带は、古代から現代にいたる様々な時間の集積された場所と言えるであろうか。その様々な時間の層が、詩人の意識の層全体を示しているということになる。

このように、賢治は、当時の一般の関心が県南に集まっていたときに、県北の岩手山麓を基盤として自らの心象宇宙を形成しているたと考えられる。その賢治の「イーハトヴ」構想は、柳田國男の「遠野物語」構想に比されるが、賢治にとっての「滝沢村」は、柳田にとつての「遠野」にあたると言つてよい。その両構想の立脚点の違いを探ることによって、二人の進もうとした方向の違いを査定することができるともされない。前掲の赤坂憲雄氏の論文は、そういった方向を示唆するものである。「遠野」、「滝沢村」両地方の「基層文化」にどのような違いがあったのか、赤坂氏の言うよう

に、「稱作文化」と「稱作以前の文化」と言えよいか、あるいは縄文文化と弥生文化のちがいと云えよいか、⁽²⁾、難かしい問題である。

このように岩手山麓を、「聖地」「ドリームランド」として求めた賢治であったが、第一集、最終章『風景とオルゴール』の中では、「そこはちやうど両方の空間が二重になつてあるとこで／おれたちのやうな初心のものに／居られる場処では決してない」(詩「宗教風(の恋)」と言ひ、生命と信仰とが分裂する以前の、古代の楽園を求めようとする試みは、第一集の終わりで断念されたと考えられるのである。そして、詩「熔岩流」の最後で、詩人は北上山地を遠望しながら、「あれがぼくのシャツだ／青いリンネルの農民シャツだ」と言ひ、これからの進路を暗示している。このように、第一集から第二集にかけて、大きな方向転換がなされていることは明白で、それは、心象の遍歴のコースから言へば、岩手山麓から北上山地へという方向転換を示すと言える。(遠野も、北上山地側に属する)この方向転換は、どのように評価されるであろうか。また、第一集における心象の展開は、どのように見られるだろうか。これが第一集の最大の問題点であろう。これについては、別稿で論ずる。

注

- (1) 『宮沢賢治研究叢書第二巻 賢治地理』(小沢俊郎編著、学芸書林)解説、及び『小沢俊郎 宮沢賢治論集』第三巻『文語詩研究・地理研究』(栗原敦、杉浦静編 昭62・6)の栗原氏解説参照。

- (2) 小沢俊郎「録した山々の名」(『四次元』昭37・1、25号、

のち『賢治地理』に所収、『小沢俊郎 宮沢賢治論集』第三巻に再録)

- (3) この土性調査が「イーハトヴ」構想と関連するであろうことは、すでに、亀井茂氏が「宮沢賢治の『神貫郡地質及び土性調査』参加の意義」(『宮沢賢治研究、アニヴァール』Vol.2 平成4・3)で、指摘しているところである。

- (4) 「岩手県立博物館総合案内」(平成2・10)

- (5) 内田朝雄「賢治詩と自然観」(『解釈と鑑賞』昭57・12)

- (6) 小沢俊郎「北上川に添って」(『四次元』昭38・3、11号、のち『賢治地理』所収、『小沢俊郎 宮沢賢治論集』第三巻再録)

- (7) 金子民雄『山と森の旅』(れんが書房新社 昭53・4)

- (8) 「秋田街道」(『四次元』昭41・10、42・3、のち『初期作品研究』(学芸書林、昭51・7)に収録、さらに『小沢俊郎 宮沢賢治論集』第三巻再録)「沼森」(『四次元』昭41・9、

- 12、のち『初期作品研究』所収、さらに、『小沢俊郎 宮沢賢治論集』第三巻再録)「秋田街道」『沼森』『柳沢』の位置」(『四次元』昭42・4、のち『初期作品研究』所収、さらに『小沢俊郎 宮沢賢治論集』第三巻再録)

- (9) 斎藤文一『宮沢賢治と銀河体験』(国文社、昭55・10)

- (10) 天沢退二郎「小岩井から小岩井へ」(『宮沢賢治の彼方へ』思潮社初版 昭43・1、増改補訂版 昭52・11)「現代詩と宮沢賢治 歩行と詩法」(『解釈と鑑賞』昭48・12、のち『宮沢賢治』論)筑摩書房、昭54・11)▽

- 杉浦静「『小岩井農場』の成立」(『日本文学』昭51・10、のち

『宮沢賢治、明滅する春と修羅 心象スケッチという通路』
△蒼丘書林、平成5・1√所収)

(11) この点についても、既に、小沢俊郎が、「森やのはらのこひびと——『一本木野鑑賞』(「四次元」昭39・11)で次のように触れている。

岩手山、岩手山麓へしばしば行ったことは周知のことだが、念の為『第一集』から拾ってみよう。『屈折率』『くらかけ山の雪』『日輪と太市』が前年の一月、『小岩井農場』が五月、『滝沢野』『東岩手火山』が九月で、『風林』『白い鳥』がこの年の六月、長短合せて八篇がこの付近で作られている。

(12) この実地踏査については、宮沢賢治記念館の高橋万里子、牛崎敏哉両氏に、大変お世話になった。謝して御礼申し上げます。

(13) 「滝沢村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ」(滝沢村教育委員会編、平元・3)

(14) 下斗米昭一『滝沢の今昔』(滝沢村小・中学校新転入教職員研修資料 平元・3)

(15) 注13参照。

(16) 宮城一男『農民の地学者 宮沢賢治』(築地書館、昭50・1)による。

(17) 注14参照。

(18) 吉見正信『原体剣舞連——その実景からの志向——』
〔「解釈と鑑賞」、平5・9〕

(19) 渡部芳紀「宮沢賢治文学散歩(童話篇)」〔「解釈と鑑賞」
昭59・11〕

(20) 最近発掘されて話題となっている青森県三内丸山遺跡は、五百人ぐらゐの集落が、一ヶ所に千五百年も定住していた縄文のある縄文遺跡で、これまでの「縄文」⇨否定住型文化、「弥生」⇨定住型文化といった考え方を覆す可能性があるという。とすれば、縄文型、弥生型といった文化の類型自体にも曖昧さが生じてくるかもしれない。